

律法ではなく信仰によって生きる ガラテヤ 3:7-14

ガラテヤ人への手紙の学びを続けていますが、パウロが強調している大きなテーマとして、義認とはイエス様にある信仰を通して与えられるもので、律法に従うことによるものではないということを見てきました。今回は、信仰には2つの大きな要素 – 聞くことと信じること – があることを学びました。皆さんの中には信仰とは正しい教理を持つこと、あるいは納得できる理論がなくても信じること、だと思っている方もいらっしゃるかもしれませんが、聖書的な信仰とはそのようなものではありません。信仰とは神様が私たちに（多くの場合内なる人、つまり聖霊に）語りかける超自然的な現象で、それを信じた結果が行動となって現れるのです。これは聖書の至る所に提示されており、パウロもまたガラテヤ書の中で語ろうとしていることです。今日は、律法ではなく信仰に生きるとはどういうことか、ということについて学んでいきます。

今日のみことばでは、アブラハムが信仰の人の例として挙げられています。「アブラハムは神を信じ、それが神の義とみなされました。そういうわけで、信仰による人々が、信仰の人アブラハムとともに、祝福を受けるのです。（ガラテヤ 3:6,9）」私は、ここでアブラハムが挙げられている理由は、彼と神様とのはっきりしたやりとりがあったからだと思います。このような信仰は私たちが持つべき信仰で、律法によるものではなかったことを示しています。律法はアブラハムの死後数百年経ってからモーセを通して与えられたので、この時代にはまだありませんでした。ですからアブラハムは律法から離れた信仰の良い見本です。「律法によって神の前に義と認められる者が、だれもいないということは明らかです。『義人は信仰によって生きる。』のだからです。（ガラテヤ 3:11）」

では、パウロが「律法」という言葉を使う時、何を言おうとしているのか考えてみましょう。律法とは旧約聖書の中のできるべきことやしてはいけないことが書いてあるものだ、と言って良いでしょう。が、それはあまりにも広範囲に及ぶのでここでは詳しくは触れません。律法はイスラエルの国の手引きとなるもので、数千年にわたって物事の判断の基準であり生活の中心となるものでした。律法自体は聖なるものですが、それは義とは何か、ということを示す権限があるだけで、私たちの中に義を生み出すためのものではありません。現に律法は義を生み出すどころか私たちを罪におとしのろいとなりました。「律法の行ないによる人々はすべて、のろいのもとにあるからです。こう書いてあります。『律法の書に書いてある、すべてのことを堅く守って実行しなければ、だれでもみな、のろわれる。』（ガラテヤ 3:10）」ここに律法に信頼を置くことの危険性があります。律法は守れなかった場合のろいを伴います。すべての律法を守れる人は一人もいないのは明らかです。律法には恵みがないので、律法をやぶった時点でその報酬としての罰を受けなければなりません。

律法はイエス様がこの地上にいらして聖霊が約束されるまでの間の一時的な保証に過ぎませんでした。イエス様の十字架上の犠牲による贖いまでは私たちは罪の奴隷でのろいの下にあり、聖霊とのつながりがありませんでした（3:14）。今やイエス様が来てくださり律法の条件をすべて満たし、完全な生き方をして罪人として死んでくださったので、私たちには律法が不要となりました。良い行ないをすることに重点を置く律法はもはや廃止され私たちは信仰に生きています。聖霊を通して私たちは神様との関係だけに専念することができ、神様とのつながりの深さは信仰によって得られるもので、良い行ないに左右されるものではありません。神の子となるためには努力によるのではなく、単に受け入れればよいのです。「あなたがたはみな、キリスト・イエスに対する信仰によって、神の子どもです。（ガラテヤ 3:26）」私たちの日々の生活は「ああしろこうしろ」という長々としたリストに支配されるのではなく、すべての神の子に与えられる信仰（聞くこと、信じること）によるのです。そしてそれは私たちの罪を贖うため、主イエスが十字架の上で血を流してくださったことによって信じる者一人一人に注がれた聖霊が約束してくださっています。